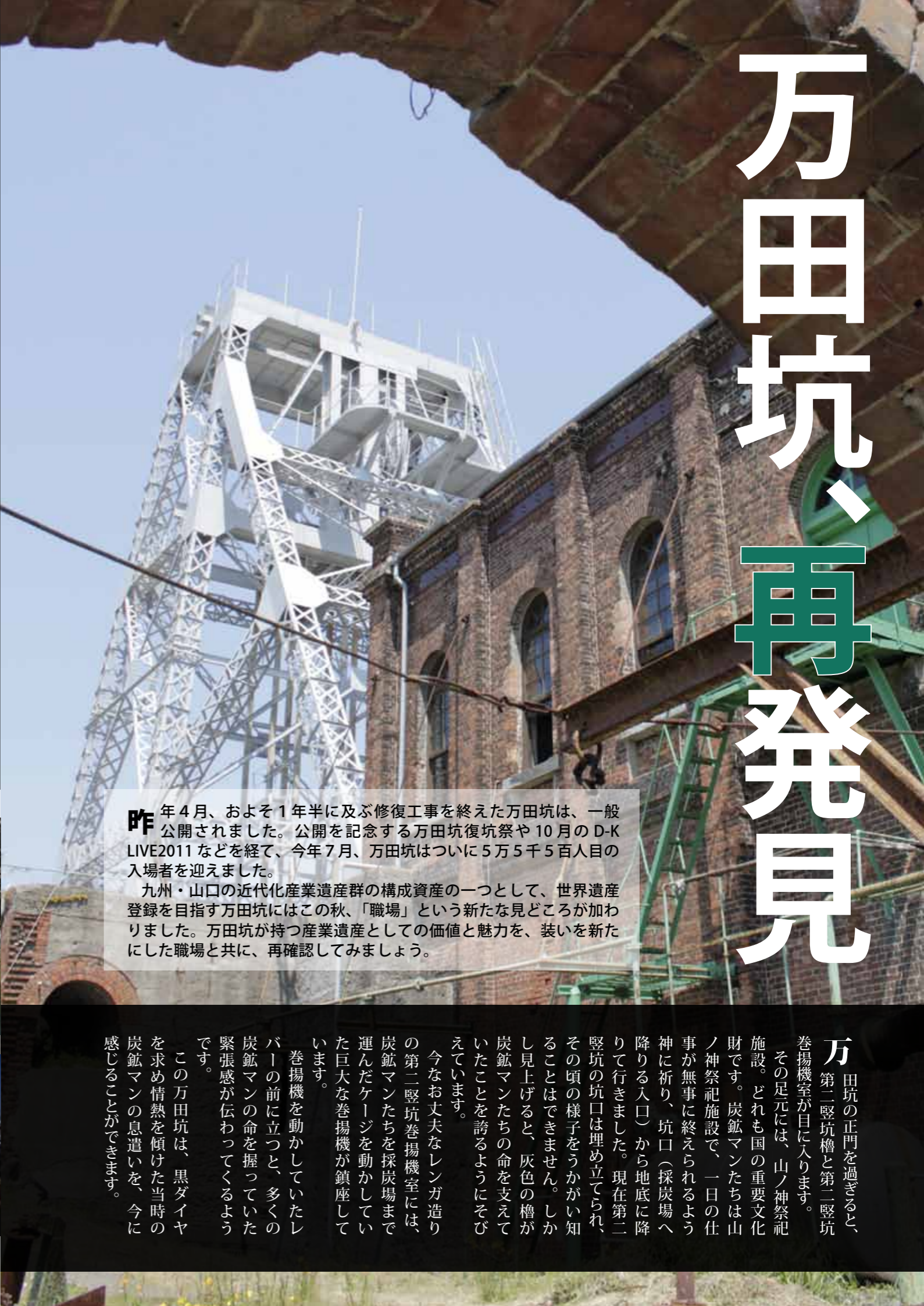


万田坑、再発見



昨年4月、およそ1年半に及ぶ修復工事を終えた万田坑は、一般公開されました。公開を記念する万田坑復坑祭や10月のD-K LIVE2011などを経て、今年7月、万田坑はついに5万5千5百人目の入場者を迎えました。

九州・山口の近代化産業遺産群の構成資産の一つとして、世界遺産登録を目指す万田坑にはこの秋、「職場」という新たな見どころが加わりました。万田坑が持つ産業遺産としての価値と魅力を、装いを新たにした職場と共に、再確認してみましょう。

万田坑の正門を過ぎると、巻揚機室が目に入ります。その足元には、山ノ神祭祀施設。どれも国の重要文化財です。炭鉱マンたちは山ノ神祭祀施設で、一日の仕事が無事に終わられるように祈り、坑口（採炭場へ降りる入口）から地底に降りて行きました。現在第二坑坑の坑口は埋め立てられ、その頃の様子をうかがい知ることはできません。しかし見上げると、灰色の櫓が炭鉱マンたちの命を支えていたことを誇るようにそびえています。

今なお丈夫なレンガ造りの第二坑坑巻揚機室には、炭鉱マンたちを採炭場まで運んだケージを動かしていた巨大な巻揚機が鎮座しています。

巻揚機を動かしていたレバーの前に立つと、多くの炭鉱マンの命を握っていた緊張感が伝わってくるようです。

この万田坑は、黒ダイヤを求め情熱を傾けた当時の炭鉱マンの息遣いを、今に感じることができます。



1_三角西港（熊本県宇城市）。万田坑が開削された時代を背景にした今月放映のNHKドラマ「坂の上の雲」（原作・司馬遼太郎）のロケ地にもなった。

2_三池港の閘門（福岡県大牟田市）世界遺産の構成資産として組み入れるべく検討が進んでいる。

3_三池炭鉱旧宮原坑跡（福岡県大牟田市）万田坑とセットで国の史跡・重要文化財に指定されている。

その価値は歴史にあり



Manda Coal Mine

三池炭鉱旧万田坑施設
万田坑の、今は解体された第一坑坑から最初に出炭を開始したのは、1902（明治35）年。その頃の日本は、日清戦争（1894年—1895年）で得た賠償金をもとに北九州に八幡製鉄所を建設し、工業の重心を製糸などの軽工業から造船などの重工業に移そうとしていました。この重工業への転換を支えたのが、当時主力エネルギーであった石炭であり、良質な石炭を産出していた万田坑をはじめとする三池炭鉱でした。三

池炭鉱の石炭は、戦前の日本の工業を支えていました。しかし第二次世界大戦後は国内のエネルギー政策の転換により、主力エネルギーは石油へと移行し、石炭需要は低下していきました。1951（昭和26）年、万田坑は採炭効率の低下から石炭採掘の役割を終え、その後は揚水や坑内管理に利用されていました。そして1997（平成9）年の三池炭鉱閉山と共に、長い歴史に幕を下ろしました。万田坑以前の堅坑櫓は木造で、接合部分の補強にのみ鋼材が使われているのが主流でした。しかし万田坑の櫓は総鉄骨造です。この点だけでも万田坑が当時、いかに重要な坑口であったかを感じることができます。実際、三井が日本の炭鉱の模範とするべく、総力を挙げて整備した坑口でした。万田坑は、日本の近代化に貢献した三池炭鉱の優れた技術を伝える貴重な施設であり、採炭・選炭・運炭の一連のシステムが今なお分かる施設であることから、国の史跡・重要文化財の二重指定を受けています。

世界遺産をめざす価値

2009年、ユネスコの世界遺産暫定リストに、万田坑を一構成資産とする「九州・山口の近代化産業遺産群」が掲載されました。その後も構成資産の変更などを行いながら、現在も7県12市で世界遺産本登録を目指して取り組みを進めています。

万田坑を含む近隣の炭鉱関連遺産は、奇跡ともいわれる日本の急速な近代化を、エネルギーという側面から支えた重要な遺産として高く評価されています。

古くて新しい

魅力職場



ノスタルジックな雰囲気を感じさせる窓辺。

「職場」とは、万田坑の坑内で使用する機械類の修理や工具の工作を行うための施設で、国の史跡の一部に指定されています。万田坑の配置図から1926（大正15）年から1939（昭和14）年の間に建てられたと推測されます。作業場と工具庫からなり、中には旋盤やボール盤、工具類が残されています。

1997（平成9）年の閉山後、職場の屋根は次第に崩壊し、2009年（平成21年）に保存整備工事が始まった時には屋根だけではなく小屋組も殆ど壊れていました。そこで2年掛けて調査と保存修復工事を行い、本年11月に一般公開しました。

作業を行うための明るさを確保するため、窓の多い造りになっているのが特徴です。また、安全性を考慮しつつ、当時の面影を残すように錆止めなどの工夫がされています。

万田坑「職場」▶

木造軸組構造一部レンガ造、平屋・切妻造・棧瓦葺、床面積166.86㎡、高さ6.44m（作業場）6.03m（工具庫）、屋根瓦は福岡県久留米市で生産されていた城島瓦を使用。城島瓦は当時、石炭を使うことによって当時国内第3位の瓦の生産量を誇っていた。

◀屋内には、掲示物そのままの風情で残され、当時の空気を感じることができる。



みねあつし●1963（昭和38）年生まれ、辻町在住。普段はエンジニアとして菊池市に勤務し、日曜日だけ万田坑のガイドを勤めている。父親が四ツ山坑に勤務していたため、四ツ山社宅に住んでいたこともある。英語でのガイドで難しいのは、炭鉱の専門用語だとか。



▲11月20日（日）にガイドを勤めていた皆さん。右から瀬戸洋さん（緑ヶ丘4・5丁目）、三根さん、吉田信子さん（長洲町）。吉田さんは親子2代でガイドを勤めているそうだ。

万田坑では現在、ガイドが多く活躍しています。

その一人、三根敦さんはガイドを始め、おおよそ一年。仕事の傍ら休日にガイドを勤め、万田坑の魅力を伝えていきます。

仕事で海外に住んでいたことがある三根さんは、外国人観光客へのガイドとしても活躍しています。

「英語でガイドが聞けるとは思わなかった、と喜んでくれました」と明るく笑

う三根さん。万田坑との関わりや、ガイドをする中で感じた万田坑の魅力を語ってくれました。

「古いものや歴史が好きなので、家の傍にある万田坑には興味がありました。

万田坑の魅力は、開国後にたった50年で西欧に追いついた日本の奇跡の発展を支えた施設が、そのままの姿で残っていることです。

私は炭鉱に勤めていたわけではないので、元炭鉱マ

ンのガイドの皆さんには知識面では足りない部分もあります。しかし初めて万田坑に訪れた人で炭鉱のことを良く知らないという人に、自分なりに理解した万田坑の良さや魅力を、噛み砕いて取り付きやすく伝えることが使命だと思っています。

もっと詳しく知りたいと感じてもらって、二回、三回と来てもらい、より詳しい説明を聞いて、万田坑に親しんでほしいです」

聞いて知る魅力

産業遺産の魅力は「底力」 大地の力、そして人の力 熱いエネルギーの歴史を荒尾から世界へ

万田坑が一般公開されてから約一年半、復元された調整池や建物も、ようやく周囲の景色なじみ始めました。今回新たに「職場」が修復され、稼働していた当時からさらに雄弁に語ってくれる施設となりました。

万田坑は施設が歴史的に貴重であるだけでなく、働いていた人たちの日常を色濃く感じられるところに魅力があります。近代化のエネルギーとなった石炭を、地底から命がけで掘り上げた炭鉱マン。その底力を万田坑で直接感じてもらえば、荒尾が潜在的に持っている熱いエネルギーをも感じる事ができるように思います。

今の日本の礎となった近代化を支えたことが、世界遺産候補としての万田坑の価値であることを認識すると、あの巨大な櫓がいつそう誇らしく輝いて見えます。

1月9日（月・祝）、文化センターで「世界遺産シンポジウム」が開催されますので、ぜひおいでください。万田坑の価値を私たちが再発見することで、世界への扉は自ずと開いていくはずですよ。